HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Impact of bladder neck angle measured by postoperative magnetic resonance imaging on mid-term recovery of urinary continence in prostate cancer patients undergoing robot-assisted radical prostatectomy

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2022-01-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 寿樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003936

論文審査の結果の要旨

前立腺全摘除術後の尿失禁は患者の QOL 低下につながる比較的頻度の高い合併症である。近年、手術による下部尿路の解剖学的構造変化が及ぼす術後尿禁制への影響が注目されている。今回、申請者は前立腺癌に対するロボット支援根治的前立腺全摘除術（RARP）後の患者において、磁気共鳴画像法（MRI）を用いて膀胱頸部角（BNA）と膜様部尿道長（MUL）を測定し、術後 6 か月での中期尿禁制に影響を与える臨床解剖学的な予測因子の同定とスコアリングモデルの構築を試みた。

2016 年から 2019 年の間に前立腺癌に対して RARP を施行された患者のうち術後 6 か月の尿禁制の評価が可能であった 200 例を対象とし、当院倫理委員会の承認のもと、術後 3 か月時の MRI を用いて BNA と MUL を測定した。中期尿禁制の達成の有無をエンドポイントにして、多重ロジスティック回帰分析で解析した結果、BNA と MUL はそれぞれ独立したパラメータであった。また ROC 曲線より得られたカットオフ値をもとに、術後 BNA: 65° 以上を 1 点、MUL: 9mm 以上を 2 点としたスコアリングモデルを構築したところ、点数が高いほど尿禁制の回復率が高いことが明らかになった。

審査委員会では、BNA が測定時の膀胱内尿量や直腸の状態により変化する可能性や、術前の MRI 画像を用いて術後尿禁制の状態を予測することが可能か等について議論がなされ、申請者よりそれぞれ適切に回答がなされた。

今後、別の患者集団を対象に本研究で構築されたモデルの検証を行う必要があるものの、本研究は BNA と MUL を用いて術後尿禁制の回復を予測する新たなスコアリングモデルを提唱した点で高く評価された。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者　　主査　竹内　裕也
副査　五島　聡　　副査　安部　正和